

茶の湯文化学会会報

No.99

第99号 / 2018年12月26日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

第四十一回研究会報告 チエンライ・インドシナ半島深奥部茶の旅

岩田 克美

昨年の訪問地ベトナム・ハノイの最終日だった。ホテルの車寄せの向こうに小さなテントが設えてあり、二つの灰皿に喫煙者が集まる。朝の出発時間を待っている時、事務方の軍制服に身を包んだ浅黒い男が歩み寄り「火を貸せ」と。男は、「どこから来た？」と問い、「自分はタイ王国の軍人であり、仕事でハノイに来た」と言って微笑んだ。ひとしきりタイ王国の美しさを自慢し、「次はタイに來い」と言い残して行ったが、この時に今年の行き先が決まったように感じる。

チエンライは遠い。タイ最北の都市で、ミャンマー・ラオスの国境が迫り、山を越えたら雲南だ。時差は二時間で、フライトはバンコク乗継ぎ。羽田を午前中に出発して、ホテル到着は二十三時に近い。ホテル前の道を一〇〇メートル散策し、マツサージ店の多さに驚いて一日目が終わる。

今回の研究会のハイライトは、ミアン「食べるお茶」だ。自分自身は全く未体験。団長の熊倉会長は、ミャンマーの食べるお茶（地中に埋めた竹筒で発酵させるもの）の取材経験があり、タイ北部のものを比較検討するのが、旅の大きな目的のひとつである。

唐代に陸羽が著した「茶経」には、茶の異名として「檜（カ）、設（セツ）、茗（メイ）、薺（セン）」の四つが示されている。熊倉会長は、このうちの「茗」がミアンに通じるのだろうと解説してくれる。

二日目午前中の訪問地ドイ・メーサロンでの昼食後、ミアン生産者のいる集落を目指す。バスは小一時間幹線道路を南下した後、山道に入って更に小一時間着いたかと思うと、センターラインが無く頻繁に舗装の途切れる谷沿いの道に入り、三十分ほどでやつと目的の集落に着いた。暗くなつてからこの道を戻るというのも危険なので、早々に茶畑に案内するという話になる。

茶畑と言っても、広々と地平線まで広がるものではない。ジャングルと言つてもいい高木の茂る中に、樹高四メートルほどの茶樹が点在している。茶樹はアッサム種で、高木の日陰を必要とするとのこと。確かに、このような植生で水はけ・風通しを求めると、平地ではありえない。収穫用の籠を背負った女性は、竹製の簡単な鉤を持っており、高いところにある枝を引き寄せて先端の若葉を摘む。摘み取るのは一葉全てではな

く、数分の一を枝に残す。雨季の間に随時収穫すること。

摘んだ茶葉は、煮た後、おにぎり大・ミルフィーユ状に纏めて竹皮の紐で縛り、瓶に入れて発酵を進める。食べるときは、刻んだ生姜を添え、粗塩を少々つけて。普段の食事では、最後に食べて歯磨き代わりのスッキリ感を得るし、歯を強くする成分も含まれているという。また、ハレの席では参列者が共に食する特別の食べ物であるとのこと。

論より証拠でミアン一個購入。発酵食品



ミアン（食べるお茶）の仕込み作業

であるが、飛行機の気圧変化もまあ大丈夫そう。

「飲むお茶」の茶畑と工場は2箇所訪れた。ドイ・メーサロンとシンハ茶園だ。

山道を登りに登って辿り着いたドイ・メーサロンの茶畑は、山のうねりを覆って広々と続いている。この風景がこの地をリゾートとして発展させる一因となっているのだろう。茶樹の種類は烏龍茶で、売り物の茶の種類は「十七番」などの番号で呼ばれている。

シンハ茶園は、市街地から遠くなく、自



ドイ・メーサロンの茶畑

然を満喫できるテーマパークだ。中には動物園もあるが、本業のビールのエンブレムであるシンハ（獅子）は正面入り口の丘の上に立つ巨大な黄金の像だけで、動物園にはいない。週末には大賑わいになるとのことだが、ともかく広い。園内専用のオープン車で、風を感じながらメインスポットを巡る。茶工場は日本企業の運営で、静岡から日本人技術者が来ている。ドイ・メーサロンとは別の形で、茶業のタイ文化への溶け込みが進んでいるように感じる。

茶業のタイ文化への溶け込みと述べたが、つまり、今の形は新しいということだ。元々、タイに飲茶の習慣は無かったという。それでは、何を栽培し生業としていたか、どんな変化があったかということになる。

「栽培」繋がりにある訪問地は、ゴールドラントライアングル（タイ・ミャンマー・ラオス国境の地帯）と少数民族の村かも知れない。ゴールドラントライアングルに関して、ウイキペディアの記述を引用する。ミャンマーに関して、一九九六年に麻薬王の武装放棄・二〇〇二年にケシ栽培禁止令が出て改善が進むも、消滅には未だ遠いようだ。一方、「タイ北部では麻薬生産はほぼ消滅したといわれ

る。最近では治安もよくなり、観光客も立ち入れるようになってい」とされている。

観光地としてのゴールデントライアングルは活気に満ち、無料のフェリーで渡れるラオス領メコン川中洲の中国資本によるカジノも賑わっているようだ。かつてケシ栽培で生計を立てていた農民は、代わりの換金作物としてサトウキビ、コーヒー、茶の栽培に移っているわけであるが、台湾向け烏龍茶の栽培が成功を収めている。中国における国民党と共産党の角逐の結果、雲南から移り住んだ国民党サイドの人たちが、茶の生産・輸出に大きな役割を果たしている。ドイ・メーサロンのお茶もこれに当たる。

旅で生の見聞を広めるのは良いことであるが、それなりに通用する先入観を持ちそれを修正していかないと、誤解のスパイラルに陥る心配がある。インドシナ半島の国々は私にとって先入観の空白地帯であり、少数民族が入り乱れ、麻薬王が支配していた土地となるとかなり手強い。

ゴールデントライアングルの歴史の陰を見つめる施設としては、観光区域内に二〇〇一年に設立されたオピウム博物館が外せない。ケシの栽培・収穫、阿片の交易に関

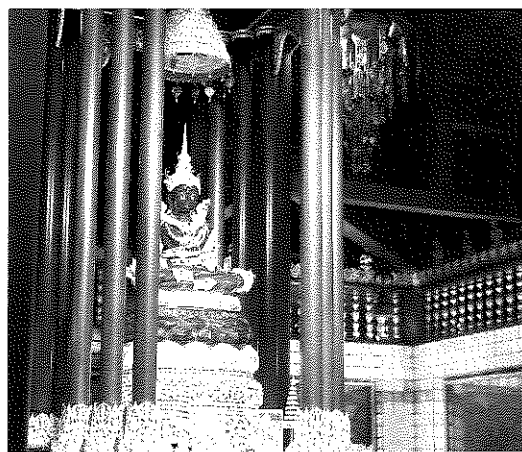
する資料文物で満ちている。労働力であった少数民族の、写真に残る笑顔が印象的だ。今もタイ王国内に暮らす少数民族は、タイ国民扱いではなく、チェンライ県から出ることが許されていないと聞いた。博物館の後に、少数民族の暮らす村を訪れたが、感想を記すにはまだ知らないことが多いように思う。

寺院は三箇所訪れた。「どうせ古くからの由来が多少異なっても、似たり寄ったりだろう」と、たかをくくっていたら、三つがそれぞれ個性的だ。

古さで際立つのは、ワット・チエディルアン。ゴールデントライアングルから遠くない場所に建つ。一二九一年に王の命令で建立したとある。八角形鐘型のストウーバ（仏塔）が国で一番高く聳えたとあり、現在は八角形が分からないほど風化が進んでいるものの、落ち着いた威容を誇っている。本堂は、本尊の背後以外は壁が無く、通りすがりでも本尊を拝める気楽な造りだ。古い寺院の様式はこうだったのだろうか。

ワット・プラケオは、仏教寺院と言われて想像するものに一番近い伽藍だろう。際立つのは、本尊仏像の古さと由来だ。有名なエメラルド仏は現在バンコクのワット・プラ

ケオにあるが、このチェンライが故郷（再発見地）だ。現在チェンライにあるものは、一九九一年に信者の寄進・奉納されたものとのことで、「心は未だこの地にあり」といったところだろうか。それで、エメラルド仏像がいつ造られたかとなると、紀元前に遡らしい。インドシナ半島の地で造られ、インドに渡り転々とした後、インドシナ半島に戻ってきた。戦火を経る中で行方知れずになっていたが、一四三六年に漆喰の仏の中から再発見された。その後の紆余曲折も本堂の絵図に記されている。エメラルドと呼ぶが翡翠製の。



ワット・プラケオのエメラルド仏

同じ色合いの明かり採りにより、仏像の安置された本堂がエメラルド色に沈むのも幻想的だ。

ワット・ロンクンはアミューズメントパークだ。一九五五年生まれのアーティストは、仏教モチーフのポップなアートに留まらず、寺院自体も企画して建ててしまった。一九九七年から建設が始まり、まだ継続している。バルセロナの聖家族教会と東京デイズニールランドを混ぜて、手頃な規模にした感じ。純白の本堂がまず目を惹き、いくつもある主要な建物のモチーフの豊富さに驚かされるが、実は細かなところまでこの寺院ならではの造形に満ちている。

日本への帰途もまた長旅で、夜間飛行だった。バンコクの空港で長い乗継ぎ便待ち。

この旅で、インドシナ半島の深奥部に関して「それなりに通用する先入観」を持ち始めることができた。そことは異なる、玄関口バンコクに関しては、また次の機会を待つこととしよう。ハノイでタイ王国の美しさを語った軍人の笑顔を思い出しながら、搭乗ゲートをつくぐった。

例 会

東京例会

(平成三十年七月二十八日)

「わかもと製菓創立者・長尾金弥の茶の湯

―新出史料「宜春亭記」より―

岡 宏憲

長尾欽弥はわかもと製菓(株)の創立者で、昭和初期に酵母を鏡剤にした「若本(わかもと)」を販売、売り上げを飛躍的に伸ばして巨富を得た。そうして得た資金をもとに古美術を購入、戦後の昭和二十一年(一九四六)には長尾美術館を設立、近代数寄者として活躍した人物である。長尾欽弥は本邸の宜雨荘(東京都世田谷区)、別邸の隣松園(滋賀県大津市)と扇湖山荘(神奈川県鎌倉市)の三つの邸宅を保有していたが、宜雨荘は昭和三十八年に都立深沢高校、隣松園は平成十八年(二〇〇六)に解体され宅地となった。但し、宜雨荘にあった茶室「宜春亭」は六義園(東京都文京区)に移築され、この「宜春亭」に関する史料「宜春亭記」が今回新たに発見され、報告者が古書で購入した。本報告はその

史料の紹介と、長尾欽弥の茶の湯について先行研究を整理し、新史料から見えてくる長尾欽弥の茶の湯の新たな姿に迫るものである。

「宜春亭記」は、縦十七・五cm、横二十四・五cm、和装本、全二十九丁、内墨付十七丁(一丁目及び十九、二十九丁目までの十二丁は遊紙)、表紙中央部に「宜春亭記」と題箋が貼られ、本文と同筆とみられる。昭和十八年七月二十五日徳富蘇峰宛長尾欽弥書状(徳富蘇峰記念館所蔵)と比較を行い、「宜春亭記」は長尾欽弥の真筆であることを確認した。内容は昭和十八年三月十六日から昭和十九年一月十五日までの九会が記され(内、道具組が詳しく記されたのは三会のみ)、その他には東京の茶人で「十二人会」の設立を構想していることや、「茶碗ほか名器には魂あり」など長尾欽弥の茶道観が記された貴重な史料である。参会者は松永耳庵、畠山一清、五島慶太、小林一三といった延命会会員だけでなく、皇族の東久邇宮稔彦王、内閣総理大臣を務めた近衛文麿、侯爵の浅野長武、軍令部総長の永野修身など多岐にわたる。また会記中の道具も、現在福岡市美術館(松永コレクション)に所蔵されている高麗雨漏茶碗や、国宝の可翁寒山図(現在はサンリツ服部美術

館所蔵)などが記されている。

今後の課題としては、「宜春亭」と長尾資料館(横浜旧軍無線通信資料館)に所蔵される長尾家史料の調査を行い、白崎秀雄『当世畸人伝』中の「長尾よね」を超える研究を重ね、長尾欽弥の茶の湯像を明らかにしていきたい。

「表具裂から考える徐熙筆鷺絵の伝来と影響」

佐藤 留実

大阪歴史博物館に寄贈された、鴻池家伝来の染織文化財の合同調査を行った結果、名物裂をはじめ清朝などの貴重な渡来織物が存在することが再確認された。

そのうち、「濃標地雲宝尽文緞子」は、「珠光緞子」の付箋を有し、『乗邑名物記』(『三冊名物記』国会図書館本)に収載する、松屋名物「徐熙筆 鷺絵」の表具裂における文様に、酷似した意匠であることが確認された。同時に、本品の一部には、大きく長方形に切り取られた跡があり、表具の残り裂と考えられた。従って本品は、「鷺絵」が松屋を離れた後、一時期、大阪の鴻池家が預かり、鷺絵の模本が作られた可能性を示すものではないだろうか。

管見の範囲ながら、伝来する鷺絵の模写を確認したところ、土佐光起、一乗院宮真敬法親王など、計十二幅の情報を得ることができた。表具裂が確認できた八幅には、本品と同文様は認められなかったが、一件、類似裂があり、一文字を抜いた珠光形式の表具も存在した。また、興味深いことに、四件の筆者は大阪に拠点があった土佐派であった。他に、狩野派や円山応挙とする模写もあり、鷺絵の存在は、絵師たちにとっても、その評価も含め、大きな影響を与えたのではないだろうか。

(平成三十年九月二十九日)

「平重盛伝来の箱書をもつ

内金張り茶碗(射和文庫蔵)と馬蝗絆」

岩田 澄子

二〇一二年十月、論者は茶の文化学会近畿例会で、伊勢の豪商・竹川竹斎が設立した射和文庫(三重県松阪市)に所蔵される内金張り茶碗について発表した(拙稿、会報七十九号)。外面はこげ茶色で天目釉のような文様が描かれ、金の覆輪があるような仕上げの金属製茶碗で、箱の蓋裏に平重盛を筆頭に八名の名前が記される。

この箱書は、平重盛の次男資盛が伊勢に

幽閉された際に盛国が生まれており、その末裔が信長や秀吉に滅ぼされるといふ、いわば「伊勢を舞台にした、もう一つの平家物語」を象徴的に示すものであった(鈴鹿市龍光寺 閑栖・衣斐賢讓氏の『昇龍の影』参照)。

茶碗現物は、鑄造ではなく鍛金による製法で、島津製作所京都本社で組成分析を行った結果、外面は銅一〇〇%、内面は真鍮(銅七十五%、亜鉛二十五%)に金メッキを施したものであった。誰が、いつ頃、どこでこの茶碗を作り、なぜこのような箱書が付せられたのかは、今後の課題である。

ところで近畿例会で発表した際、平重盛の逸話がある青磁茶碗・馬蝗絆の名称について「蝗のような鉄釘(鏝)で補修されているから」という現在常識となっている説明をしたところ、汪玉林氏(北京外国語大学教授)と倉澤行洋氏(神戸大学名誉教授)から「馬蝗と蝗は全く違う」と指摘され、同年十二月に再考した(拙稿、会報七十五号)。

馬蝗は蝗(イナゴ)とは関係なく、蛭(ヒル、leech)のことである。元時代の『酷寒亭』では「びったりくっついて離れない」という比喩として使われており、ヒルは外観だけでなく、その性質も似ていると言えよう。日本

では馬蝗が「うまびる」と訓読されており、「馬蝗絆茶甌記」を著した伊藤東涯は「馬蝗^ニヒル」と理解してこの文章を書いたと考えられる。

東海例会（浜松会場）

（平成三十年九月二十二日）

「尾張徳川義直と小堀遠州」

深谷 信子

徳川家康の九男・徳川義直（一六〇〇年生れ）は、一六一九年に六十二万石の名古屋城主になり、一六二六年に従二位権大納言に昇った。

小堀遠州（一五七九年生れ）は、一六〇四年から幕府の畿内重職官僚として働いた。その役割は、武力で関ヶ原の戦いに勝利し覇権を握った徳川氏が眞の天下人になるために、茶湯、御所・城郭の作事、紛争裁許等の文化・政治両面の力量で、畿内上下階層を統制することであった。

義直と遠州の関係は、遠州が、慶長期に名古屋城天守閣と御殿造営を指揮監督した時、次に一六一七年、大量の国友鉄炮を駿府城に輸送のため、尾張の付家老成瀬正成・竹腰正信に引渡した時などに生まれた。さらに、

一六二六年の後水尾天皇の二条城行幸の折の出会いである。

遠州は、行幸行事前後に、茶会を二十四回催し、約百人の客のうち、行幸の朝幕間折衝役である義直と近衛信尋とを招いている。行幸の名目は朝幕の和融であるが、幕府は、全国から上洛した三十万人の武家と、畿内の公家をはじめ各階層への威圧と統制を意図した。上方郡代の遠州は上洛と行幸の全てを取り仕切った。狩野探幽に指示した二条城二の丸御殿広間の障壁画は、將軍の權威にひれ伏す武士や公家達を、長押の上まで枝を伸ばした巨大な松から、鋭い目をした大鷲が見下す。床の松図・二重折上格天井・調台構・違棚・付書院の全ては上段に着座した將軍の權威を誇示しようとした。身内や家臣と対面する黒書院・白書院、天皇が滞在する行幸御殿の襖絵は、淡彩や墨絵の花鳥・山水画で飾った。秀忠死去後の一六三四年、家光は実権を握り、政權の確立、畿内以西への統制、朝幕間和融を示威するため上洛する。義直は名古屋城本丸御殿に滞在する家光のため上洛殿を新築し、探幽に、善政を敷く中国皇帝の「帝鑑図」を、水墨着色で正面に描かせた。余白の多い画法で、襖や長押の上まで花鳥・山水

を描き、欄間彫刻は、極彩色の瑞鳥が皇帝の善政を讃え、政權確立に向かう家光を莊嚴していた。遠州は、上洛した家光から、新たに全国的な幕政への関与と、政權に相応しい茶の創造を命じられている。

近畿例会

（平成三十年九月八日）

「吉村観阿の『法華勸進状』寄進の時期」

宮武 慶之

文化十四年（一八一七）四月六日、吉（芳）村観阿（一七六五—一八四八）は若い頃から重宝とした「元久二年重源上人勸進状」（東大寺蔵。重要文化財）を東大寺に寄進し、その後、勸学院内に墓所が与えられ、寿藏を建立する。そもそも東大寺は平安時代末期に平重衡（一一五七—一一八五）による南都焼き討ちにより罹災したため、重源は東大寺再建のための大勸進に任せられる。そのとき重源により寺社造営のための勸進を行なう旨の勸進状が書かれた。観阿が寄進した勸進状とは、元久二年（一一〇五）十二月、東大寺東塔の完成後は童を配して法華経を千部、転読させたい旨を認めたものである。

観阿の寄進についての顛末は、亀田鵬齋

(一七五二—一八二六) による寿蔵碑文と、勸進状にある観阿自筆の奥書から判明する。

しなしながら、なぜこの時期であつたのかはこれまで明らかにできていない。この出来事に大きく関係すると思われるのが、同年正月二十五日の不昧により孤篷庵に寄進された大圓庵披露の茶会である。この茶会では没後に寄進される雪舟等陽(一四二〇生)による「圓相」(大徳寺孤篷庵蔵)を本席の掛物として使用している。すなわち、二人の間には、自身の重宝とした作品を寄進すること、墓所を求めるといふ二点が共通している。

本発表では観阿が大圓庵披露の茶会への参加が目的で、不昧に帯同していたことを資料から明らかにした。観阿は文化十四年正月から遅くとも四月六日以前に奈良東大寺の公般上人の元に赴き、勸進状の寄進を申し出ている。また同年五月に鵬齋に碑文を依頼している。以上の点から、正月に不昧の大圓庵披露の茶会に参加したことが、東大寺への寄進の決定付けたと結論した。

「趙陶齋—ある茶好きの書家の話—」

影山 純夫

趙陶齋(一七二三—一七八〇)は長崎生まれの江戸時代中期の書家である。早くに孤児となり、来朝した黄檗僧竺庵に引き取られ僧としての修養を積む。竺庵が万福寺に招かれたに従い上京、二〇歳代で還俗する。諸国を遊歴した後書家として江戸でしばらく過ごし、その後大坂へ、そして堺へ移り死去。墓は南宗寺本源院にある。

趙陶齋は黄檗の寺で育ったこともあつて、幼いときから煎茶に親しんでいたことは間違いがなからう。諸国遊歴中も各地の茶に興味を持ち(飲んでいたこと)を自身で書き残している。木村兼葭堂との親しい関係から見ても煎茶との深い関係が生まれていたことは間違いない。また抹茶にも関心を持っており楽しんでいった。趙陶齋は酒好きで多に酒を楽しんでしたが、病を得て酒を茶にかえたという。

趙陶齋にはかなりの数の随筆があり、その中には茶について書いたものもある。日本の茶について詳しいだけでなく、中国茶についてもかなりの知識があつたことがわかる。抹茶の世界についてはかなり厳しい見方をしていたようで、道具も身近にある道具で

事足りるし、作法も『草人木』を読めばわかるとする。

江戸中期に煎茶と抹茶に通じていた知識人はそれほど多くはないと思われる。それ故に趙陶齋の存在は大いに興味を引くのである。

○煎茶といふハちかころ乃事なり唐もむかしハ皆磨茶なり龍團鳳團といふハ茶の事なり墨の形のなしたるを一丸茶碗に入れにへゆをさし人乃飲とき丸乃かたちとける様にこしらへたるなり炭も黙炭などいえるハけたもののかたちすみをやき爐中にての景色をもてあそひたる事に見ゆ茶磨などいふものはしめは唐より来るとしるへし日本ちやうすの事となり西國東國のうち今も磨茶をのむところあり元來茶查を、しみたるなり茶を摘む時節も宇治の上茶をつむころなり上方つねの煎茶といふハ甚はた龜末なり小枝ともに折摘たるもの、磨するにたへさるもの直もいやしき道理なりすへて煎茶といえはそまつに調度するもとに見ゆ此煎茶の類肥煎うれしなのと第一とすへし播州にも仙靈青柳など煎茶なり御銘なりといふ江州信楽よき煎茶を出す山ふきなしむしなどよき煎茶なり宇治にも折れ鷹朝日山など

あり駿州阿倍川よきせんちやを出ス此外處々ありといふいづれもうれしのに及ハす長崎も唐傳を得てよきせんちやを製す江戸より東ハいつれもよろしからず我薩摩より東金華山まで遍歴所々の茶をしれり唐も韃靼の方茶なり年々中土より送る事明書に見えたり三十萬斤餘の事なり唐も所々茶いつるなり珠蘭茶龍井茶などハウれしもの、ことくにして香味格外の事に覚ゆ武彝茶といふあり日本絶てなき茶なり茶のいろ紫黒色酒後にハかならず此茶を出ス風味甚たよし口中清涼無上の雅品なり肥後さつまなど皆龍井茶のことし肥後相良などこと上品なりむかしよく唐製茶をつたへたることに見ゆ鎌倉にて榮西禪師の喫茶記といふを見侍り明慧上人はしめて梅尾山に茶を植へられたりといふ唐土よりたねはしめて来るは梅尾といふ

『陶斎隨筆』中之島図書館

○南都松屋トイエルモノ徐灝カ鷲繪ヲ所持ス名物也茶入ハ松屋肩衝盆ハ存清茶碗ハ古高麗各由緒アル道具ノ由聞侍へり

『隨問隨筆』中之島図書館

○日本も茶を出し侍る國々多く有る中に煎茶とするものハはりまの國或ハ駿河の國此

二國ハ製法同様に見ゆ西にて肥前肥後或ハ長崎にて唐製を伝へ唐末の龍井と珠蘭と同様に製し侍る香氣あつく風味も格別にして他國にハ類なし宇治茶ハ此類の極品にして王公大臣も諸侯大夫も皆これを用ひ侍る事にして茶道坊主數寄屋方などを知らしたるも指し侍るも有りて茶床茶所數寄屋四疊半の丈室をいろ／＼に略して三疊二疊或は臺目疊などの作法を定め路次待合などの方をも相定めそのミちの流儀をも利休宗旦といふより遠近石菰などの小諸侯の分ニ相應のこのミを申傳へてそれを一流の法にして是を傳へて渡世し侍るものも甚だ多し茶を飲むことを次ぎにしてしかたと道具とをいふのミの事成行侍るかそれてハ茶道のミちにあらす我等こときの者の大病得酒をのミ侍らす歩行を得せず讀書寫字の間ニ冬ハ爐を囲ミ夏ハ風炉を用意して湯を絶やし侍らす有合の煎茶磨茶時のよろしきにまかせ來客ニ是をのませ自分も是をのミ朝夕の飯後ハいふに及ハす讀書寫字の□□らくて退窟ニも及び侍るとき□□き品を何によらす是を佐として一椀をたてもしたて侍るひとあらハ是をたのミて亭主とし□人一客茶つけ湯付時々出來合有るにまかせて又一碗唐の蘆全の茶の歌にくハしく茶の徳を申

せしを□し出し兩脇の清風を冬夏の差別を論し侍らす仙靈の世外のひとときハ俊逸なる所を自然と塵俗のさハかしきを相忘れ何となく詩を文をと風がを催し侍るにて暫時も病苦を忘れ侍る大奇特を得て今ハいよ／＼おこたり侍る事にあらずなど、いふになりて門人の茶をこのミ侍る人あれハ茶入をこゝに水さしをかしこになと、その品のたかきやすきをいハす人々もちあき侍る物などをしハらくかせよ又ハくれよ或いハ送り侍らんなど、いふ間に一通り茶をたて侍るほどの品あつまりて不足もせず餘慶もなく全體ハすミ火と水と相應し侍るをまちてくら／＼とにへ侍るを今こそと一ふくやうかん饅頭くし柿などの有り合ものをひきすり出して自分にかきおこし侍る書か画かを紙表具して是をかけ園中有る品の艸木何品によらす花あるを折り取り是を生てゆふ／＼くはん／＼とむかふの播磨方のうミ山を眼にまかせて是を見帆かけふねなどの入りついでつし侍る間に

『趙陶斎隨筆』国会図書館

○榮西國師喫茶の記は鎌倉にて見侍り禪林にて茶堂の規約もあることなり一會茶話の時茶板といふを打つことなり此茶板をしらせの鑑

或ハ石磬又ハ尊客には亭主御むかひに出るな
とさま／＼の事ある様にきこゆ

『陶齋先生随筆』中之島図書館

○南都の古き古老うつしおきたる喫茶のうた
百五十首われ所持したるを何者か袖にしさる
や今はなしその内にも花見よりかへりし客に
茶をたさは花ハいけぬか茶の湯なりけりとあ
り萬事此こゝろもちと見へ侍り

『陶齋随筆』天理図書館

○茶の事ハ家々の傳これあるやうになれ共畢
竟は痴人面前夢を説くといふ様に覺え侍り一
通の稽古は艸人木などにもすむことにおも
ふなり臺子のことも古溪和尚の工夫と聞侍り

『陶齋随筆』天理図書館

○酒を休めたれハ茶をこのむなるべきやうに
一炉をかまへこゝにひとつかしこにひとつも
らいあつめてひと通り是にてすむといふもす
まぬを思へばよるきるほどによろつゆたかに
太平を祝し奉る

『陶齋随筆』中之島図書館

例会のご案内

東京例会

平成三十一年二月十六日(土) 午後二時

(会場：根津美術館)

「立花有得と福岡の南坊流」 篠原佐和子

「室町殿行幸御節記」について(仮)

松本紗代子

東海例会

平成三十一年三月二十四日(日)

午後一時半

(会場：浜松市茶室「松韻亭」)

「茶書と茶の湯の歴史」

原田 茂弘

金沢例会

平成三十一年三月十日(日) 午後一時半

(会場：ITビジネス武蔵五階研修室)

「天目碗からみた日中の茶文化事情」

——「天目」の由来インゲン豆——

岩田 澄子

高知例会

平成三十一年二月三日(日) 十時～正午

(会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室)

「高知支部三十一年度事業計画」 未定

茶 席 十時～十六時

茶の湯文化学会の研究成果を
実践する。茶の湯を一般の方々に
親しんでもらうため「床飾り」「道
具立て」はするが、お点前はお
客次第として楽しめる茶席を設
ける。

会 費 三百円



計報

初代会長 中村昌生先生が十一月五日お亡
くなりになりました。謹んでご冥福をお祈
り申し上げます。

中村昌生先生は、茶の湯文化学会が平成
五年十月に創立してから同十二年度に至るま
での三期八年にわたり会長を務められ、当学
会の礎を築かれました。予定では、追って会

報第一〇〇号に、中村先生が執筆された会報
 第一号「発刊にあたり」の巻頭文を再度掲載
 したいと考えております。

新刊案内

※『袋師が見る 数寄の名脇役 茶の裂』

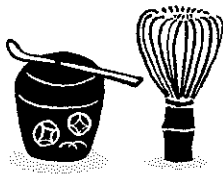
三浦和子著 淡交社(定価二、六〇〇+税)

袋師である著者が手掛けた道具を中心に
 紹介しながら、その魅力をひも解いた一
 冊。

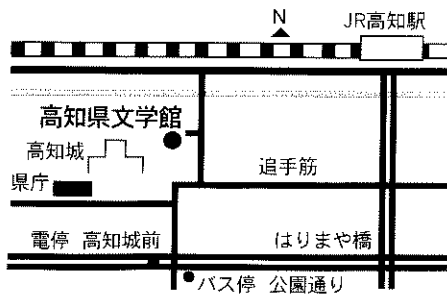
※十一月より、ホームページのドメインが
 変わりました。

<http://www.chanoyu-bunka-gakka.jp>

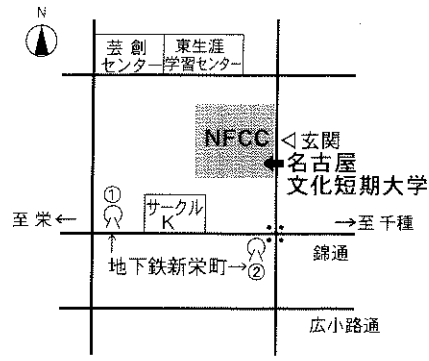
※年会費未納の方は、至急お払込み下さいま
 すよう、よろしくお願いいたします。



高知例会々場（高知県文学館）



高知県丸ノ内1-1-20



アセンブリ・ホール（A館3階）

※明るいレンガ色の建物です。

〒461-0004 名古屋市東区葵1丁目17-8 TEL052-931-7112